令和２年度第１回
東京都江戸東京博物館資料収蔵委員会
資料収集部会

令和２年11月４日（水）

東京都江戸東京博物館　２階会議室

午前10時00分開会

大森文化施設担当課長：それでは定刻になりましたので、東京都江戸東京博物館資料収蔵委員会を開催させていただきます。

本日はお忙しい中、御出席いただきましてありがとうございます。

ただいまから令和２年度第１回「東京都江戸東京博物館資料収蔵委員会資料収集部会」を開催いたします。

私は東京都生活文化局の文化振興部文化施設担当課長の大森と申します。よろしくお願いいたします。

議事に入りますまで司会を務めさせていただきますので、どうぞよろしくお願いいたします。

まず初めに、東京都生活文化局文化施設改革担当部長の工藤から御挨拶を申し上げます。

工藤文化施設改革担当部長：皆様、おはようございます。工藤でございます。

本日はお忙しい中、当委員会に御出席いただきまして誠にありがとうございます。

東京都では、各美術館、博物館の設置目的にのっとりまして、優れた芸術作品や歴史的資料の継承、東京の芸術文化や歴史の内外への発信などを進めるため、収集方針を定めまして計画的に収蔵品を購入しております。

そのような観点から、本日の収蔵委員会では264点の作品について、当館に所蔵する資料として妥当であるかどうか、委員の皆様の専門的な視点から御審議をいただければと存じます。

当館におきましても、本年は全国の文化施設と同様、コロナ禍の影響で予定しておりました展覧会、イベントの多くが中止や変更となっております。平常に戻るにはもう少し時間が必要かと思われますが、来年には今年延期となりましたオリンピック・パラリンピック東京大会の開催も控えております。日本文化を再認識し広く紹介する、またとない機会となると思っております。感染症拡大防止対策を適切に行いまして安心で快適な施設とし、また収蔵品をさらに充実することによりまして江戸東京の魅力を強く発信し続けていきたいと考えております。

本日は何とぞよろしくお願いいたします。

大森文化施設担当課長：ありがとうございます。

それでは、続きまして東京都江戸東京博物館館長の藤森から御挨拶を申し上げます。

藤森館長：今回は絵画や消防関係など本当に当館にふさわしいものが候補に挙がっていますので、よろしく御指導のほどお願いいたします。

大森文化施設担当課長：それでは、次に本日御出席いただいております委員の皆様を御紹介させていただきます。

私の左手の席のほうから順に御紹介させていただきます。

松尾委員でございます。

金子委員でございます。

金山委員でございます。
根崎委員でございます。
神谷委員でございます。
山梨委員でございます。
福原委員でございます。
よろしくお願いします。
なお、武田委員、中村委員については事前に御欠席との御連絡をいただいておりますので御報告させていただきます。
続きまして、事務局職員を紹介いたします。
東京都江戸東京博物館副館長の小林でございます。
東京都江戸東京博物館事業企画課長の飯塚でございます。
それでは、これから議事に入りたいと思いますけれども、まずは委員長を選任したいと思います。
当部会の委員長は、「東京都江戸東京博物館資料収蔵委員会設置要綱」第９の規定により、委員の互選により定めることとなっております。
では、委員長の選任をお願いしたいと思いますが、いかがでしょうか。

（山梨委員、挙手）

山梨委員、お願いいたします。

山梨委員：僭越ですけれども、委員長を金子先生に、副委員長を松尾先生にお願いできればと思います。よろしくお願いいたします。

大森文化施設担当課長：ありがとうございます。
ただいま、金子委員を御推薦いただきましたけれども、ほかに御意見はございますでしょうか。
よろしいでしょうか。

（「異議なし」と声あり）

それでは、委員長は金子委員にお願いしたいと思います。
次に、副委員長の選任もお願いしたいと思いますけれども、先ほど山梨委員から副委員長としては松尾委員を御推薦いただきましたが、ほかに御意見ございますでしょうか。
よろしいでしょうか。

（「異議なし」と声あり）

大森文化施設担当課長：それでは、副委員長は松尾委員にお願いいたします。
金子委員、松尾委員、どうぞ席をお移りいただけますでしょうか。

（金子委員、委員長席に移動）

（松尾委員、副委員長席に移動）

大森文化施設担当課長：ありがとうございます。
それでは、委員長に進行をお願いする前に、当部会の公開について御説明させていただ

きます。

当部会は「東京都江戸東京博物館資料収蔵委員会設置要綱」第12の規定により、原則公開となっております。そのため、委員皆様のお名前と現職名は東京都のホームページ上にて公開しております。

しかし、議事内容の公開につきましては、資料収集決定前の審議の段階で対象資料の詳細を公開することが現在の資料所有者の方に不利益を生じさせるおそれがあること、また、本日実見する資料の実物はあくまでも審議の参考用に所有者の方から借用している段階でございますことから、事務局といたしましては昨年度の資料収集部会と同様、委員の皆様にお諮りした上で、本日の段階では冒頭のみ公開し、議事内容は後日、議事録により公開することが適当と考えております。

なお、当部会の議事録の公開に当たっては、委員の皆様に事前に御確認いただき、その上で公開したいと考えております。

非公開にするには同要綱第12の第１項（２）及び第２項（２）の規定によりまして、部会での決定が必要になりますので、今回についても皆様でお諮りいただければと思っております。

それでは、金子委員長、松尾副委員長、議事の進行につきましてよろしくお願いいたします。

金子委員長：御指名ですので委員長を務めさせていただきます。よろしくお願いいたします。

今、事務局から御説明のありました、この部会の非公開ということで説明がございましたけれども、いかがでございましょうか。それでよろしいでしょうか。

（「異議なし」と声あり）

金子委員長：それでは、昨年同様、これまで同様、非公開ということで進めていきたいと思いますのでよろしくお願いいたします。

議事録については後日公開するということで、先ほど御説明のあったとおりでございます。

それでは、早速議事に入りたいと思いますので、事務局のほうから今年度の資料の収集方針と本日審議いたします収集予定の資料の説明をお願いいたします。

飯塚事業企画課長：では、説明の前にお手元の資料の御確認をお願いできればと思います。

まず、一番上に会議次第がございます。

資料１、委員名簿がA4で１枚ございます。

資料２、収蔵委員会設置要綱がA4で２枚ございます。

資料３、東京都江戸東京博物館資料収集具体的方針がA4で１枚ございます。

資料４、令和２年度東京都江戸東京博物館の収蔵品購入に関する方針について、がA4で１枚ございます。

資料５、令和２年度第１回資料収蔵委員会説明資料がA4で３枚ございます。

資料６、令和２年度第１回資料収蔵委員会付議資料が、A3の横判で11までナンバリングしている資料がございます。

なお、お配りしました名簿に誤りがございましたら、恐れ入りますが、後ほど事務局へ御連絡いただければと思います。また、お手元の資料につきましては、現時点では未公開の情報が含まれておりますので、会議終了後、回収させていただきたく存じます。

それでは、今年度の資料の収集方針を御説明いたします。

資料３の東京都江戸東京博物館資料収集具体的方針を御覧ください。この資料は、令和２年度の収蔵品購入に関する方針について記載したものでございます。

今回はこの中でも特に２つの項目に重点を置き、資料の収集を図りたいと考えております。

第１に、方針３（１）に基づき、常設展や当館の性格に合致した継続的事業に繰り返し生かすことが可能な資料でございます。

第２に、方針３（２）に基づき、常設展の内容をより充実させるために必要な時代、分野の資料でございます。

続きまして、今回御審議いただく資料について説明いたします。

A3横判の資料６、令和２年度第１回資料収蔵委員会付議資料を御覧ください。

今回は委員の皆様に審議していただく案件としまして、購入を予定している資料がございます。資料の内容はこの後詳しく御説明申し上げます。

それでは資料６を２枚おめくりください。３枚目の紙の右下に「１」とノンブルがございます。このページが今回の付議資料の総括表でございます。

表の一番下の欄を御覧ください。付議資料の点数は、購入資料が264点でございます。

表の左から２番目の列に区分とございますが、購入資料の内訳は標本資料が255点、映像音響資料が９点でございます。

さらに左から３番目の列に資料分類とございます。分類別では標本資料のうち絵画が７点、彫刻が１点、工芸品が３点、生活民俗が114点、印刷物が130点でございます。また、映像音響資料のうち、静止画が９点でございます。

この後のページに購入資料の入手先別と分類別の点数を一覧表にしてございます。

続きまして、主だった資料について個別に御説明いたします。

A4の資料５、令和２年度第１回資料収蔵委員会説明資料を御覧ください。また、先ほど御覧いただいたA3横判の資料６の４ページ以降に資料リストを記載しております。この資料リストの左端にありますナンバーの欄に記入された５桁の番号が説明番号と同じ番号となっておりますので、併せて御参照いただければと存じます。

では、各資料の説明に移らせていただきます。

まず、「１．鯉図」でございます。資料番号は資料６、資料リストの４ページ、ナンバー１でございます。この資料は葛飾北斎画、天保10年のものです。葛飾北斎（宝暦10年～嘉永２年）の子孫の家に伝来した肉筆画で水面の波紋越しにゆったりと泳ぐ鯉を描いた作

品です。画面の右下には「八十老卍筆」の落款と「かつしか」の白文方印があります。「遊鯉図」（天保10年・岡田美術館所蔵）に類似していますが、同じ署名形式は現在のところ見出されておりません。

本図を収める木箱の表には「葛飾北斎画　水中之鯉」とあり、蓋裏には曽祖父の葛飾北斎が、母多智（天保2年～明治19年）の白井家への嫁入りに際して贈った旨の伝来が、北斎の曽孫・白井家13代・孝義（嘉永４年～昭和３年）によって記されています。多智は北斎の次男で御家人加瀬家の養子となった加瀬崎十郎の長女で、北斎の孫娘に当たります。孝義は飯島虚心の『葛飾北斎伝」（明治26年）執筆時の取材に応じ、先祖の北斎や北斎の娘応為などに関する伝聞を伝えています。

北斎の子孫については、玄孫以降の消息は長らく不明でしたが、近年の研究で現在につながる子孫が明らかになりました。本図は作品そのものの価値に加え、作品の来歴、北斎にまつわる家伝なども貴重な記録となっており、併せて北斎研究上重要な意義を持ちます。

当館は北斎の錦絵や版本は所蔵していますが、肉筆画は「万歳図」１点のみであることから、本作品を収蔵できれば館蔵コレクションの充実を見込むことができます。今後、常設展「江戸の美」のコーナーをはじめ様々な展覧会で活用が見込まれます。

次に、「２．上野浅草図屏風」でございます。説明番号は資料６の４ページ、資料リストのナンバー２でございます。

右隻には浅草寺と夏の隅田川、左隻には春の寛永寺と不忍池を描いた六曲一双の屏風です。右隻には隅田川を水平に描き、画面上部の東岸には回向院、牛嶋神社、木母寺までを、下部の西岸には駒形堂から今戸、浅草寺、待乳山聖天を描いています。左隻は寛永寺の黒門前から大仏、本坊、東照宮五重塔までを描き、下方に不忍池弁天堂を配しています。それぞれの寺院や門前町を細やかな風俗描写で捉えています。

左隻第六扇左上や右隻第二扇手前をはじめ、ところどころに補彩と思われる部分が見受けられますが、両寺院の伽藍とその周辺地域を俯瞰的に描きながら画面構成にも破綻がありません。また、浅草寺門前の絵師の店など様々な生業も詳細に描き込み、都市風俗の研究資料としても興味深い作品です。

本作は落款・印象を欠き、作者・作画年代共に未詳です。景観年代は明暦の大火後に架橋された両国橋の寛文元年を上限とし、寛永寺清水観音堂が摺鉢山から現在地に移る元禄７年を下限とします。また、寛永寺と浅草寺という江戸の二大聖地かつ行楽地を一対に描く「上野の花見・隅田川の船遊び」の主題は18世紀前期に流行し、菱川派や宮川派などの浮世絵の流派やそれらに属さない町絵師によって描かれましたが、本作もこれらの系統に位置づけられるものと考えられます。

上野の花見や隅田川の花火など、現在に続く都市風俗を描く興味深い作例であるだけでなく、かつ情報量豊富な本作品は展示効果が高く、常設展「江戸城と町割り」「町の暮らし」「江戸の四季」の各コーナーをはじめ様々な展覧会を教育普及での活用が見込まれます。

続きまして、「３．昭和大東京百図絵　第五十三景　堀切の花菖蒲」小泉癸巳男画、昭和９年の作品です。作品番号は資料６の４ページ、資料リストのナンバー６でございます。

小泉癸巳男（明治26年～昭和20年）の代表作の一つで、昭和５年から12年にかけて発表した「昭和大東京百図絵」の一図です。

本シリーズは、不忍池や亀戸天神といった江戸時代以来の名所の系譜を引く風景画に加え、コンクリート製のビルディング、隅田川に架けられた鉄橋、当時珍しかった跳橋、放送局など、関東大震災後の復興事業を経て誕生した「大東京」の新名所を描いた作品群から構成されます。

当館では1991年と1995年の二度にわたって本シリーズを収蔵しましたが、全百景のうち第五十三景の本図だけが欠落しており、今回、本図を収集することで百景が全てそろうことになります。

堀切は広重の「名所江戸百景」にも描かれる江戸時代以来の花菖蒲の名所であり、戦前の堀切には複数の菖蒲園が存在していました。本作品からは東京近郊の新しい観光地として改めて注目を集めるようになった堀切の菖蒲園の景観ばかりでなく、点景として描かれた人物の姿から、当時の服装などもうかがうことができます。

本図の収集により当館の新版画コレクションをさらに充実させるとともに、常設展「モダン東京」のコーナーで活用することができます。

最後に「４．消防・日本橋・祭礼関係資料」です。説明番号は資料６の４ページから８ページのナンバー３から５と、ナンバー７から136、さらに11ページのナンバー１から３でございます。

江戸風俗研究家として知られる旧蔵者が、長年にわたり収集してきた資料群の一部で、江戸東京の消防関係資料をはじめ、日本橋や祭礼に関する資料260点からなります。

まず、（１）の消防関係資料です。定火消同心の火事装束は伝世品が少なく、革羽織、頭巾、胸当、石帯といった装束類が一式でそろうのは極めて貴重です。町火消関係では、刺子が普及する以前の特徴である半纏を複数枚重ね縫いした痕跡を持つ「い組」平人の半纏や裏地に龍虎の勇壮な絵柄と「芳貞」の銘が記されている刺子長半纏があります。また、鳶口や熊手など破壊消防に使用する道具、水を運ぶ玄蕃桶や町火消の「に組」の組頭の家に伝わったという龍吐水の２分の１スケールのひな形、「い組」の詰所で使用されたと伝わるけやき製の煙草盆、火事に関する高札など、消防にまつわる多様な資料群からなります。

これらは常設展「町の暮らし」「江戸の美」の各コーナーで展示できるほか、災害関係の展覧会でも活用できる貴重な資料です。

続いて、２の日本橋・祭礼関係資料に移りたいと思います。資料６の資料リスト４ページのナンバー７、「恵比寿・大黒天像」は江戸末期の日本橋架け替えの際に生じた橋板を用いて、高村光雲の師、高村東雲（文政９年～明治12年）が彫刻したものです。

ナンバー４の「一石橋より三越を望む」は、大正６年11月の日本橋裏河岸倉庫街の様子

を描いた塚本閣治（明治29年～昭和40年）の油彩画です。当時の日本橋周辺の様子をうかがえる作品といたしましては、このほかにもナンバー６の石川滋彦（明治42年～平成６年）の水彩画、日本橋風景図、日本橋にあった百貨店三越・白木屋に関する絵はがきも多数あります。これらの資料は常設展「町の暮らし」「モダン東京」の各コーナーで活用が見込まれ、当館所蔵の日本橋関連資料に厚みを増すことができます。

また、ナンバー19、「山王祭礼静人形山車模型」は、山王祭礼のために瀬戸物町、小田原町、伊勢町の発注を受け、松雲斎徳山が嘉永元年に製作した山車のひな形と考えられます。なお、山王権現社が徳川家の産土神であったため、明治維新後、祭礼は神輿の渡御だけになり、山車の巡行は認められず、山車の中には関東近郊の都市へ売却されるものもありました。嘉永元年に松雲斎徳山が製作した山車は、明治７年に栃木県栃木市の有志に売却され、現在もとちぎ秋まつりで使用されており、江戸型山車の地方移転の典型的な事例として知られています。また、東京都青梅市も徳山作の静人形山車を所有しています。

日本橋・祭礼にまつわる資料群は、江戸文化を現代に伝える資料として常設展「江戸の四季」「町の暮らし」の各コーナーで活用できるほか、展覧会でも活用できます。

説明は以上でございます。

金子委員長：どうもありがとうございました。

今の時点で何か御質問等ございますでしょうか。よろしいでしょうか。

それでは、資料の実見にこれから移っていきたいと思いますのでよろしくお願いいたします。

（委員離席）

（資料実見）

（委員着席）

金子委員長：それでは、議事を再開したいと思いますのでよろしくお願いします。御苦労さまでございました。

今の時点で何か御質問等ございましたら。よろしいでしょうか。

それでは、１人ずつ御意見を伺いたいと思います。

金山先生からでよろしいですか。

金山委員：いろいろと拝見させていただきました。最初の消防関係の資料ですが、定火消同心の火事装束の関係の資料、先週、私は岐阜県高山に行ってきました。江戸から明治にかけて大火に見舞われていて、秋葉信仰が盛んで、火消関係の装束を博物館で見ました。それに比べて今回の資料はとても状態が良いし、説明にもあるように、これだけ装束の関係の資料が一堂に揃うのは極めて貴重ではないかと思います。

それから、３の「昭和大東京百図絵」の第五十三景ですが、これまでほとんど資料があったということですが、今回１点それをちゃんと補って百景全部そろうことができた。欠落していた部分が全てこれによって完結したということで、よろしい収集の仕方だろうというふうに思います。

資料５のところでは、それぞれのコレクションや収集について、展示に用いる際の考慮すべき点や、説明も分かりやすくて良いと思います。博物館には調査研究という大事な業務があるわけですが、それをなかなか見え化することは難しいのですが、例えば資料を収集することによって調査研究において、どういうような見通しを立てることができるのかということも、できれば今後の委員会のときの資料に付け加えていただけるとよろしいと思います。

あと、それぞれ専門の先生方からコメントを譲りたいと思いますので、私のほうからは以上です。

金子委員長：ありがとうございました。

それでは、根崎先生、よろしいですか。

根崎委員：まず全体的に言いますと、質の高いものばかり集まっていたなというのが第一印象です。そこで、私の専門の関係で幾つかコメントをしたいと思います。消防関係のところで非常に興味を持ちましたのが、例えば鳶口１つ取っても実用的なものなのか、あるいは螺鈿とか漆とかというものが装飾されていて儀式で使われていたものなのかなということを感じました。火事場の現場で螺鈿の装飾のある道具をあえて使うのかなとか、実はここのところが僕が分からなかったところなんですけれども、そういうことを含めて、初めてこういう実物を拝見していろんなことを考えさせられました。

それと、頭巾にしても胸当にしてもそうなんですが、残っているところには貴重なものが残っているんだなということを改めて。我々も図版では半纏だとか、纏とかを見るわけなんですが、図版とは違って実物資料からはリアルな情報を提供してもらえるんだということを改めて思いました。

次に、高札ですがかなり保存状態がよいもので、いくつかの博物館でも所蔵されていますけれども、こんなに保存状態がいい高札はそうはないように思います。墨の関係もまだ当時のままのような形で残っていますし、かなり貴重な資料であると思いながら拝見しました。

それからあと、先ほども話が出ましたけれども、小泉癸巳男の作品なんですが、昭和の前半という戦前であるにもかかわらず、色彩的にも非常にきれいで、いわゆる昭和モダニズムの影響を受けている作品なのかなと思って拝見をしました。今見ても現代的で何の遜色もない綺麗な図柄あるいは色彩構成で、百図全部揃いで見たら壮観なのかなと思って拝見しました。なお、先ほども話がありましたけれども、欠落している１点を補うということの意味は大きいだろうと思いました。ただ、この１点が相当人気があって通常入手しにくいものなのか、あるいはたまたま入手できたのかということも大変気になったわけなんですけれども、本当にいいものをお集めになられたなと思いました。

それからもう一点、大きな屏風の「上野浅草図屏風」を大変よく見させていただいきました。今日は地図を置いていただいていたので理解しやすかったのですが、かなりリアルに描かれているものだなということを感じました。それと一つ一つの場面の構成がかなり

しっかりしているということも分かりました。また実際に絵を見させていただいて、不忍池には蓮が多いのかなと想像していたんですけれども、蓮の絵は描かれておりませんで、水鳥や草木が描かれているという具合で、ちょっと今の不忍池のイメージとはかなり違うんだなということを、絵を見て確認できたということがあります。

それと人物はリアルというよりも幼い顔立ちの３等身ぐらいで描かれている人物が多かったわけなんですけれども、一つ一つの場面が考えられて組み立てられているんだろうなということもすごくよく分かりました。ですから、展覧会のときなどに各場面の拡大写真を一つ一つ出していただけると理解しやすいんじゃないかなと思いました。

ということで、取りあえず私のほうからは以上です。

金子委員長：ありがとうございました。

それでは、神谷委員、よろしいでしょうか。

神谷委員：私、楽しいものが幾つかありまして、まず最初に「上野浅草図屏風」、とてもきれいな、現場でもお話ししたんですけれども、景観年代がかなり絞られる、1661～1694年。それなのに制作年代を18世紀前半、1700年前半にと、これはそうする必要はないでしょうと私は思います。景観年代というのは意図があるときは別として、通常は事実に合わせて書くものだと思いますので、景観年代を押さえて、言ってみればこれがその時代の基準作の一つになり得ると思いますので、18世紀前半にそういう主題が浮世絵の中で流行したから、あえてそこにもってくるのではなくて、やっぱり景観年代でこれがこの時代の基準作になり得るということを最初に押さえて、これから研究を進めていければいいと思います。内容的には非常に面白いもので、特定の何かを意図している、例えば左のほうで宴会を一杯やっていますが、みんな幔幕に紋が描いてある。あの紋が何か具体的な意味を持っているのかとか、それから右のほうでは隅田川で船遊びをしている。その船も何とか丸と描いてありますので、あれももしかしたら具体的なものを意味しているのかという、そういうことも思いましたけれども、非常に内容豊富で、これはまさに江戸博らしい面白い資料だと思います。どんどん研究して非常に突っ込みどころ満載だと思いますので、どんどん利用しながら、なおかつ研究も進めていっていただけるといいなと思います。

それからもう一つ、多くの皆さんが、これ北斎なのと思われたかもしれませんが、北斎の鯉の図、これは最近の『浮世絵芸術』で所有者がどういう人かというのをはっきりかなり調べてもらって、きちんと出していただきました。その直後からあの作品はいいのかという声がありました。これは真偽でいくと私は偽物ではないと思います。ただ、物足りないです、北斎としては。これは皆さんの印象そのとおりです。晩年の作でああいうふうに流水を描く、魚を描くのがありますけれども、売り絵で例えばどこそこの大名から頼まれたものとか、カピタンから頼まれてすごいお金、１幅で50両くれるとか、そういうものじゃなく身内に渡すものですから、そこまでの描き方はしないんじゃないかなと思います。偽物であるという証拠は私の中では見つかりませんでした。水流の描き方、そこに鯉の描き方です。あと80歳のときの落款の形式がほかにないという話ですけれども、ほかにある

からいいというものでもないわけで、落款の種類、あの頃本当にいっぱいあるんです。ばらばらしていて、そこはあまり私は議論しなくてもいいかなと思います。書体は晩年の書体でいいと思いますし、「かつしか」という印に至っては、これはもっと分からなくて、ステンシルというんですか、切って合羽摺みたいにやったんじゃないかとか、いろいろ言われていますけれども、とにかく分からないです。画風だけで見ていけば、私は晩年の北斎でいいと思いますし、分かってきた来歴、北斎のあれを描いた人がひいおじいさんだと、親がどうこう言っている。その親は北斎とおそらく重なっているんですよね。だとすれば伝来については間違いないでしょうし、北斎の子孫であることを言うのをはばかっていたのは、北斎さん、春画ばっかり描いていて、あんなことをやっていた人の子孫かと言われるのが嫌ではばかっていたというのもありそうな話だなと思います。

クオリティに関しては、晩年のすごい感動ものというわけではありませんけれども、そういう身近な人のために描いた作として、言ってみれば気軽に描いた。100％北斎が全部やっているかどうかも、これも分かりません。多分間違いないと思いますけれども、娘がいますから、達者な応為という、北斎には達者な娘がいて、晩年の「かつしか」印の押しているやつはかなり応為の作品が混入しています。それも含めて考える必要あるかなと思いますけれども、北斎ブランドとしては私は間違いないと思っております。

ということで、私はコレクションに入れていいと思います。なおかつ１つお願いができるならば、今、非常に苦しい時期ですけれども、文化文政頃の肉筆美人画のいいやつを１つ持っていただけるといいなと思いますけれども、値段がちょっと飛び切りしますけれども、その辺があると北斎の肉筆画がありますといって自慢というか、ようやく声が大きく言えるなと思います。

そのほかのところで、版画の堀切の菖蒲はいいと思いますけれども、消防、祭礼関係のところで、いろんな半纏とか道具がありました。これ、同じレベルの人が使っていたのか、これちょっと要検討かなと思います。実際の現場で使っているものなのか、あるいは動きもしない大将がどんと座っているだけなのか。というのは実は徳川美術館にも藩士の着る印半纏とそれにかぶるやつがあるんです。この間まで並べていましたけれども、位の高い人がこんなの着て活動したのか。するわけないでしょう。どんと座って、いざというときに使うだけであって、シンボルみたいなもので使いませんと言われましたし、鉄砲なんかでも要するにすごい飾りをいっぱいつけますわね。そういうことがありますので、一括りの資料でありますけれども、どういう人が使ったか、どういう場面で使ったのかというのは幅があるということを念頭に置いていただけるといいなと思います。

それから、金唐革がこんなに珍重されているんだなということは今、改めて私も思いました。世の人たちが金唐革が出るからといって、皆さん、徳川美術館に来るんですけれども、いっぱいあるんです。こんな大きなやつで切っていないやつとか切った後のままのやつとか、相当高価なものであったなというのがよく分かりました。

あとはそんなところで、気になった私の申し上げるべきことはそんなところでございま

す。

金子委員長：ありがとうございました。

　では、山梨委員、お願いします。

山梨委員：六曲一双の屏風がやはり非常に興味深い作品と思いました。上野浅草の地理もそうですし、人々の生活も大変よく分かっている作家さんが描いていらっしゃると思いますが、あの大きさであれだけ細かい描き込みをするというのはどういう用途だったのかなど、いろいろ興味深いと思います。先ほど根崎委員がおっしゃいましたように、やはり細部の部分にもいろいろ物語などがあったりする、けんかしている人もいたり、子供がいたり、いろいろ物語があったりするので、そういうところもよく見ていただけるような展示の仕方をしていただけたらいいなと思いました。状態も非常によいもので、見応えがありました。

　それから、洋画でございますけれども、私も塚本閣治という人をよく知らなかったんですけれども、このたび資料を頂いて調べてみましたら、台湾の市政40年でしたかの博覧会のときにもデザインで受賞したりしているような方で、後年は写真家として御活躍になったという方のようで、美術的な分野で活躍された方だということを知りました。あまり油彩画は拝見したことがございませんでしたので、今回初めて拝見いたしましたけれども、結構状態もよいもので、油彩画の画技も割にしっかりしたものがあった方だということを認識いたしました。貴重な資料かと思います。

　それと小泉癸巳男の版画でございますけれども、やはり１点だけ欠いているというのをちゃんと埋めたというのは大変意義深いと思いましたのと、状態も大変よいものだと思いました。やはり1930年代、先ほど御指摘ありましたように、モダニズムの動き、昭和期に入ってからの新古典主義的を反映して、整った様式というのになっていく、そういうものも反映している作品ですので、こちらでお持ちになって、それこそモダンジャパンですとか、モダン東京、そういうところを見せるのにはよいものと思います。

　それから、東雲の「恵比寿・大黒天像」ですけれども、東雲といいますと光雲の先生という印象がすごく強くて、あの作品は光雲につながっていく非常に高度な彫技、彫る技というのがよく表れております。光雲の息子の光太郎はもっとロダンの作品に学んで近代彫刻、西洋彫刻を受容して非常に動きのある作品を制作しますが、東雲の「恵比寿・大黒天像」は江戸期の工芸的でもあり、彫刻でもあるという、中間あたりの部分というのをとてもよく表している作品だと思います。学芸の方が資料も見つけておいでになって、そういう周辺のものも含めてこちらでお持ちになるのがふさわしい作品だと思います。

　今回たくさんございました火消のものですけれども、やはり日本は災害と共存してきた歴史が大変長いというのをこの頃非常に思います。首里城火災などを見ますと、火災が日本にとってどんなに大きな災害だったかということを思いますので、こういうふうにして災害と戦ってきたこと、そこにこういう造形的な技もあったことを伝える貴重な資料と思いました。それから今の半纏ですけれども、ミシンで縫っているわけはないのに非常に整

った縫製の技術が見られて、そういう部分でも貴重なものだと感じました。

それから、絵はがきですが、都市の景観などが写っているものもありますし、近代化していく東を伝えていく、とてもよい資料と思いました。

北斎は今、神谷先生がおっしゃったように、私はちょっと物足りないかなと思いましたけれども、御研究の方々がそういうご意見であれば、来歴の部分も踏まえ、お持ちになってもいいものと思いました。

以上でございます。

金子委員長：ありがとうございました。

それでは、福原委員、お願いします。

福原委員：私はまず山王祭礼静人形の山車の模型なんですけれども、現在、隔年、２年に１回のとちぎまつりに出ているわけなんですが、それは本物で明治７年に売られていて、現在、栃木市の倭町という町会でお持ちで、そこの静人形の頭の部分にこちらと同じ嘉永元年の徳山、嘉永元年６月新調という山王祭に合わせて作られて、これがひな形として事前に山王祭山車組第９番、小田原町など、３か町で静人形を近世の後期にずっと出しているんですけれども、耐久年数を超えたのか、大きく破損したのか知りませんが、嘉永元年にひな形を届けてオーケーが出たんでしょうか、実際に作ったものが明治７年に栃木に売られていったという意味では非常に重要であると思います。

牛が２頭いて、１頭は長柄でつながっていまして、もともと日本は近世は車両交通が発達していなかったものですから、牛車というのは江戸と駿府と仙台と京都だけということで、京都の牛町の人たちを江戸幕府が増上寺の安国殿とか、そういうのを作るときに重量運搬ということで移住させて、高輪に、おそらく寛永16年だと思うんですけれども、幕府御用として運搬の許可でお祭りに出していった、根津権現とか、結局レンタルをするわけなんですけれども、山王祭の場合は６月14、15、２日間で喜多川守貞の嘉永６年の守貞を見ますと１両だと。２日間でリザーブの牛と本物の牛と牛方２人と荷車、これがセットで１両ということ。嘉永６年の守貞謾稿だと、あのひな形、500両かな、新造すると50両というふうに書いてありますので、それまでの簡易の山車に比べると随分、耐久性はあるんですけれども高くなっているなという感じだと思います。

あと、私にとっては非常に貴重というか面白かったのが、纏なんですけれども、55、56、武家用纏のこの次のこの陀志が非常に興味深いと思うんです。山車を「山車」と当てている一番初見が明治15年だと思う。神田祭の記事です。あと大槻の「言海」（明治23年）にも「山車」と出ますが、それ以前はずっと平仮名か「出し」の表記です。私が確認している範囲では16世紀ぐらいから明治期ぐらいまでは「出し」。これは様々な馬印とか旗、のぼり、ぼんてん、旗指物、様々な長柄がついている造形物の頭部の部分名称としての山車というのがああいう纏にもずっと継承されて、こういう纏の出しというのが非常に興味深いなと思いました。

最後に美術史の先生方が言及されている鯉の問題なんですが、真贋とかそういうのは全

然分からないんですけれども、すみだ北斎美術館の常設の入り口に大絵馬、北斎が描いて関東大震災で焼けちゃった大絵馬、素戔嗚尊が15匹の疫神を退治しているという構図なんですが、北斎は御承知のように朱鍾馗図の遺留品が幾つか残っています、非常に疫病にセンシティブな北斎は疫神鎮めとして素戔嗚のみならず鍾馗様、あるいは端午の節句のイメージみたいな感じで鯉の図というのが、売り絵ではなくて親族に贈られたりなんかするときには端午、疱瘡鎮めとか、そういう疫神、疫病鎮めとしての民間信仰的な背景も深読みですけれども感じたわけです。

以上です。

金子委員長：ありがとうございました。

それでは、松尾委員、どうぞ。

松尾副委員長：今回は文書が１点もなくて、ただ歴史の資料として興味深いものばかりでした。最初の葛飾北斎の「鯉図」も絵がどういうような価値を持つかということよりも、この図がどういうふうに伝承されてきたのかなというところがよく分かり、北斎の子孫が現在もいたということが大変よく分かって興味深く思ったことと、それから「上野浅草図屏風」は描かれている人の数が非常に多くて、いかに上野や浅草が盛り場だったかということも絵のほうからよく分かる、一つ一つ風俗史的にも興味深い資料だなというふうに思ったわけです。

何よりも私が大変興味深いと思ったのは、種別では防災に入っておりますが、火消関係の資料なんですけれども、火消といいますとすぐ町火消を思い浮かべますけれども、今回のこのコレクションは武家の火消、武家の火消といいましてもいろいろ定火消とか大名火消とかございますけれども、特に使番の火事装束であるとか定火消同心の火事装束であるとか、それから火付盗賊改の兜であるとか、もちろん今までにも武家関係のこうした装束だとか兜だとか残ってはいると思いますけれども、こちら江戸博にもコレクションがあると思うんですけれども、これだけまとまって残されているのは貴重です。どうやってこれは定火消同心の装束なのか、あるいは使番の装束なのか分かるのかなということが一つ疑問として残っていて、その点はこの後、よくお調べいただけましたらというふうに思いました。

大名女房火事頭巾というのが、これ33番にリストとして挙がっておりますけれども、これは出ていなかったようで、女性用のもあったんだと思って、その点も興味深いと思いました。

あとはやはり山王祭の模型は、こういうものが残っていて、それでいろいろほかの文献資料では見たことがあるんですけれども、やっぱりリアルにああした模型が残っていますと訴える力が全然違う。牛が２匹で引いていたのねとか、江戸天下祭というのはやっぱりかなりの力の入れようで将軍が見たくなったのも無理はないなとか、いろいろ思うことが多かった資料コレクションでした。

絵はがきも丁寧に見ることはできませんでしたけれども、リストなどによりますと三越

だとか白木屋だとか、デパートの絵はがきが多くあって、これは関東大震災後の復興に伴っていろいろ作られたんだろうと思いますけれども、この絵はがき、当時の東京の名所として三越とか、こうした白木屋などのデパートというのは人々にとって復興のシンボルだったんだなというふうに思った次第です。白木屋は子供の頃、何度か行きまして、そこの白木屋の地下に名水というのがありまして、そういうことなんかもちょっと思い出して、丁寧に絵はがきを見せていただけたらいいなと思って見ました。

感想としては以上ですが、１点欠落していた絵が出てきた。これも本当に江戸博のコレクションとして一つまとまってよかったなというふうに感じました。

以上です。

金子委員長：ありがとうございました。

それでは最後、私から一言。もう十分、主要な作品に関してはいろんな御意見が出されましたので、今さらですけれども、まず最初に僕は関心持って見たのは革羽織です。たっぷりした藍染めに、裏が燻べ革ってドラムに糸を巻いて松葉で革を糸で留めて松葉でいぶす染め方です。大体ああいうものって表は藍染めで、裏は燻べた当初は輝くぐらいにきれいな色だったと思うんですけれども、大体ああいうものってさっきおっしゃったように、何かの棟梁が、鍛冶場の棟梁、それから北前船なんかの廻船問屋の棟梁なんかが船が着いたときに迎えにいくとか、あとはたしか埼玉の川越か何かにあったものすごいたっぷりとした厚みのある革羽織は黒船が来たときにこれを着て見にいったとかというようなものなんです。ちょっと儀式めいた、それで儀式が終わるとリバーシブルになっていますから、今日のものはリバーシブルできないかもしれないですけれども、反対にしてぱっと輝くのを表にしてナカに行くという、そういうようなものだったみたいです。だから、実際に使うというよりもちょっとどしっと座って指揮するとか、そんな性格のものだなと。もともと全体を煙でいぶして雨に強い革羽織にするものですから、だから表の藍染めがちょっと緑がかった藍になるのはそういうことで、色が混ざって目に入ってくるわけです。そういうあの当時の本格的な革羽織の一つだなと思いました。

それから金唐革は文字どおり日本で作ったいわゆる偽金唐革じゃなくて本当の金唐革です。ヨーロッパから壁の材料だったのを切り取って輸入して、夏目漱石にも出てきます金唐革のたばこ入れみたいな、日本で加工して袋にして使ったわけですけれども、それこそさっきおっしゃったように徳川美術館にはいっぱい残っていて、その中にあれに似たような色彩のものも、模様のものもあったと思いますので、比較されて検討されれば面白いかと思います。それから金唐革の屏風があるというので本当見たかったんですけれども、そのうちぜひ展示して見せてください。これはぜひ見たいなと思った。

そういうのと、今回、僕、面白いなと思ったのは、やはり上野の屏風、隅田川の屏風です。「上野浅草図屏風」というんですか。まさに職人づくし図屏風が散りばめられたようないろんなのがあって、隅田川のほとりで、あれはおそらく型染の何か長板中型だったり浴衣の生地みたいなのを張ってあって、伸子という竹のこういうもので反物のここに刺す

わけじゃない、入れておいてぴんとするやつです。それを子供が取っているのか、渡しているのか、子供があいうことをやっていたなというのが面白いです。おそらくああいうふうにして、あそこで糊置きか何かしたんでしょうかね。それで友禅流しみたいに糊を隅田川で流すんでしょうか。そういうような情景があって、とても興味深いなと思いました。

それから、山車の本当にちっちゃな人形表現なんですけれども、実に本格的におそらくあれ、杢調に木目込むというのとちょっと違いますけれども、いわゆる木目込み人形みたいに衣装を作ってきちっと着せて、それから顔の表現なんかも実によく描かれていて、どのぐらいでしょうか、３種類か４種類の顔が幾つかあって表情が違うんですけれども、きれいに胡粉で塗ってあって、目鼻もきちんと描かれていて、浮世絵のこういう、うりざね顔がああいうものに影響して、明治に入ると浮人形の顔になってくるわけです。それがずっと進展すると伝統工芸の人形に受け継がれて、ゆくゆくは人間国宝になっていくみたいな、そういうきちっとした本当に小さいけれども本格的に作っているなというような気がして、とても面白かったと思います。

それから、あと関羽の像、あれは何メートルぐらいあるんでしょうか。あれの４倍か５倍あるんでしょうか。だから、どうやって竹の竿か何かをつないだのかなと思いますけれども、ぜひあれも一度きっちり立てたところを見てみたいなと思いますけれども、関羽像、どうも江戸時代になると大体みんなあの顔になってくるのは何か粉本というかパターンみたいなのがあるんでしょうか。似たようなものがよく見る、あ、あの顔だなと思いましたけれども。

それからもう一つは、屏風の中で上野の寛永寺が鎌倉の大仏みたいにお堂がないやつがあったんですけれども、ああいうのあったんですか、寛永寺に。ちょっとびっくりしましたけれども面白かったなと思いました。

大体、私のほうは以上でございます。

神谷委員：今、福原先生から鯉が菖蒲、要するに端午の節句で子供の未来、健康に育つんだよということを祈っていたということを、私も北斎のほかの事例で、埼玉県で持っているのが弟子の北明？に売ったというか与えたんです。それは北斎の名前が私はこれは幾らで売った、北明？に売った、わっはっはと書いているんですけれども、要するに弟子に与えているんですよ。そういう点で北斎のほかの作品を見てみると、ギフトに与えて弟子なり孫なりなんかに与えている。岡田美術館の事情を私、詳しく知りませんけれども、そんなところで出てくると鯉の意味がもう一つ出てきて、真物だ、偽物だというところを越えて、絵としては埼玉の持っているやつのほうがいいです、申し訳ないけど、頼りない。それはやっぱり年のこともあるので、40代のものと80代の作品では随分違いますけれども、それをずっと描き続けて何かあれば人にあげて元気になるんだよということでやったとすれば、ますます面白いというのが出てくるので、少しそれ、北斎のほかの鯉、鯉魚図を調べていただくとますます面白い結果が出てくるような気がします。

以上です。

金子委員長：ありがとうございます。

ほかに御意見、御質問等ございますでしょうか。

よろしいでしょうか。

それでは、おおむね非常に高い評価を皆さん、見て述べられたと思いますので、今日出されたこの資料について本委員会として収集を承認するということでよろしいでしょうか。

（「異議なし」と声あり）

金子委員長：ありがとうございます。

それでは、そういうことでお認めいただきましたので、議事を事務局のほうにお返しいたします。

大森文化施設担当課長：金子委員長、ありがとうございました。

それでは、本日の資料収集部会の議事録につきましては、冒頭にて説明させていただきましたが、改めて申し上げます。

当部会の議事録は資料収集決定後、公開を予定しておりますので、支障のある内容がないか事前に委員の皆様に御確認させていただきますので、よろしくお願いいたします。

なお、今年度第２回の資料収蔵委員会の開催日程についてでございますけれども、来年２月２日火曜日の午前10時からを予定しております。場所はこの同じ会議室で開催させていただく予定でございます。正式な通知文書は後日また発送させていただきますので、どうぞ、よろしくお願いいたします。

それでは、これをもちまして令和２年度第１回東京都江戸東京博物館資料収蔵委員会の資料収集部会を終了させていただきます。

皆様ありがとうございました。

午前11時50分閉会

以上